【勤務参考】49　　１５．１０．２０

技術開発官（船舶）

自衛艦隊司令官講話等シリーズ（その７）

【指揮官道】（１５．５．２７）

海軍は行動（戦闘）を生命（いのち）として国家に献身する組織である。よって何処の国の海軍でも、海軍士官に授ける教育は「国難を救う一人の提督を得る為の教育」であると自負している。かかる高い志の教育を施された海軍士官は、提督に至らずとも、国難に至らぬ大事を収拾し善処できるのである。

海上自衛隊の未来であり希望である諸官は、強い指揮官に成熟して国家の干城（かんじょう；Wooden Walls）へと至る武運長久の指揮官道を極めるべし。

その要諦は次のとおりである。

１　指揮官は華となれ

指揮官は常に周りから注視されているので、その一挙手一投足は周りに大きな影響を及ぼす。よって、明朗闊達晴朗な指揮官は、往々にして、自己の才能不足を補って余りあるのである。

２　任務に対する良心から生れる責任感

指揮官は、マキアベッリ（１４６９～１５２７）の記した「天国に行く最も有効な方法は地獄へ行く道を熟知することである」を必至の覚悟と心得て、胆力練成・器量拡充・人格陶治の連続修養を為さねばならない。

古来から「勇怯（ゆうきょ；勇気と卑怯）の差は小さく、責任感の差は大きい」と言われてきた。ナポレオン〈1769～1821〉の言う“忠誠と規律”またはクラウゼビィツ〈1780～1831〉の説く“良心に対する責任から生まれる勇気”から生まれる本当の意味での責任感こそが、戦士の心を衝き動かすのである。職務や任務に対する良心から生まれる責任感は、持って生まれた性格が教育や訓練によって磨かれて確立するものである。

３　三人寄れば文殊の知恵

文殊菩薩は、剣をもって獅子に乗り、知恵を象徴する菩薩である。

どんなに能力の高い人でも、凡人二人の能力より高い時もあるが、凡人三人の能力を上回ることはない。つまり、独りで遣るより皆で遣るほうが、何事も為し得るので、部下・同僚を信頼して仕事を任せることが大切である。

その際、カエサル〈ＢＣ１００～ＢＣ４４〉が書き記した「人間ならば誰にでも全てが見えるわけではない。多くの人は自分が見たいと欲する事しか見ていない。」という、人間の陥りやすい弱点に留意する必要がある。

４　Quality Of Life こそ士気の根源

常に戦力を最大に維持しておくことは、平時戦時を問わず、指揮官の義務ですらある。戦力は、次の要素の積で表される。

戦力＝将兵の人数＊将兵の練度＊将兵の士気

＊装備の数量＊装備の性能＊機動力＊輸送力＊整備力＊補給力

これらの要素の中で、“将兵の士気”ほど振幅変動の過敏なものはない。よって指揮官は、士気高揚、士気確認及び士気回復に十分意を払い工夫しなければならない。優れた指揮官が、Force-Multiplier（戦力増殖者）と呼ばれる所以である。

そして、平時有事を問わず、士気の根源の一つに指揮官の人間観とも相まった Quality Of　Life（上質な生活＝予定の立つ生活）がある。部下の公的生活・私的生活を上質なものと為すべく、政府の予算措置の必要なものや、部隊の創意工夫でできるもの等、各種の施策が実行されているが、少なくとも部下とその家族をして、海上自衛隊の職務の関する不安がないようにしなければならない。

５　窮したら笑え

通常は、心・頭・脳が体を支配しているが、体が、心・頭・脳に重大影響を及ぼすことがある。それは、切羽詰まった窮した時でも、笑うという体の動きによって頬の血行が良くなり快感が湧き、呪縛された心・頭・脳が解放されることである。そして、心・頭・脳に余裕が生じ、また別の道が拓けてくる。

（開発官付言）

本件は、指揮官に限らず責任ある職業人として大いに参考となる教示であると思う。

自分の仕事に誇りを持ち、仲間と協力して事にあたり、技術屋の良心を持ってその事を為す。

その際、Quality Of Life を意識して自信を持ち、窮したら笑い難関を克服するよう心掛けることは大変重要である。

ということ！

完